

戦後における昭和天皇の短歌—その政治的メッセージ性とは(四)

四 昭和天皇の「松上雪」をめぐって

⑩ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

(一九四六年歌会始「松上雪」)

敗戦の年に詠まれ、翌年の歌会始の儀式は催されなかったが御製として発表された作品である。占領期ながら、御歌所が廃止になるのはこの年の四月だから、まだ御歌所が機能していたわけである。お題「松上雪」の発表は、例年の八月一日より遅れて前年一九四五年一〇月二二日であり、翌日の新聞報道によれば、御歌所長(三条公輝)は「お題」につき、つぎのように説明している(「平和と苦難へ 畏き大御心、三条御歌所所長謹話」『朝日新聞』一九四五年一〇月二三日)。

「(前略) 緑濃き松が枝にしづしづと積もれる雪、一面洵に平和の象徴とも見るべく、また積雪を冒していよいよ清節を開く有様は、他面に現下国民の苦難に耐へつつ勇往邁進する姿も見られて、そぞろに感深き御題と拝察するのであります」

この記事を読んだ、沈没した戦艦武蔵から奇跡的に生還した元少年兵渡辺清は「国民のほとんどが食うや食わずのこの混乱期に、そしてまだ戦争の責任をとってはいないのに」「<松上雪>でなにもかも覆いかくしてしまおうというのか」と記す(「昭和二十年十月二十五日」『砕かれた神』評論社 一九七七年)。

⑪冬枯のさびしき庭の松ひと木色かへぬをぞかがみとははせむ

(一九四八年一月一日 折にふれて)

⑫潮風のあらきにたふる浜松のををしきさまにならへ人々

(同上)

時代はくだって、昭和天皇追悼記事では、これらの作品は、占領政策下において日本古来の伝統を守る覚悟を国民に発信している、という鑑賞が流布した。ジョン・ダワーも近年の著作で、「松上雪」の一首について「忍耐の美しい姿を表す古典的なイメージ」を作り上げ、「(天皇の) 反抗の意を絶妙に表現したものである」とする。

さらに今世紀に入って、二〇〇二年二月四日、小泉首相の施政方針演説の「むすび」の部分で、この作品が引用され、問題となったことは記憶に新しい。首相は演説において、⑩を紹介の後、つぎのように続けている。

「終戦後、半年も経たない時に皇居の松を眺めて詠まれたものと思われまます。雪の降る厳しい冬の寒さに耐えて、青々と成長する松のように、人々も雄々しくかくありたいとの願いを込めたものと思います。明治維新の激動の中から近代国家を築き上げ、第二次大戦の国土の荒廃に屈することなく祖国再建に立ち上がった先人たちの献身的努力に思いを致しながら、われわれも現下の難局に雄々しく立ち向かっていこうではありませんか。明日の発展のために。子どもたちの未来のために。」

この演説の直後、昭和天皇の歌の引用は皇室の政治利用ではないかとする、野党一民主党、自由党からの批判が出て、自由党は、衆議院運営委員会理事会で議事録からの削除を要求したという(『日本経済新聞』、『朝日新聞』いずれも二〇〇二年二月五日)。

小泉首相は、儒学者の言葉や故事にまつわる教訓などを引用するのが趣味のようである。首相の演説といえども、官僚の作文にすぎず、ただ読み上げるだけという指摘はよくきくところだし、この小泉演説も「むすび」の部分だけが唯一自筆のままの声ではないかとの憶測もある。新世紀に入って、半世紀以上前の御製引用では、説得力もなく、時代錯誤が突出しただけではなかったか。

(『ポトナム』2007年5月号所収)